

【 論文 】

隠退した井上円了の精神修養する哲学

ウィリアム・ボディフォード (William M. BODIFORD)

翻訳：津田良生

井上円了 (1858–1919) は極めて裕福な人生を送り、また偉大な業績を数多く残している。まず、彼は哲学と教育の両分野における先駆者である。哲学者としての円了は、哲学会 (1884) の創設メンバーとなり、哲学にアジアと仏教を包括する新しい歴史的枠組みを与えることで哲学のグローバル化に努めた。また、教育者としての円了は、高等教育機関である哲学館 (1887)、また中等教育学校である京北中学校 (1899) を創立している。円了の指揮のもとに哲学館は大学にまで成長し (哲学館大学、1903)、これは後に東洋大学となる (1906)。しかし、円了が 19 世紀終盤から 20 世紀初頭の日本の知的な営みに果たした最も重要な貢献は、哲学者や教育者としての業績ではなく、むしろ講演者として、またベストセラーの文筆家としての業績である。円了は 180 冊に及ぶ著作と 800 を超える小論を執筆した (Miura 2004, 79)。これらの作品の中で彼は哲学、宗教、「日本固有の学」について精力的に論じ、またとりわけ、迷信や妖怪への批判を展開したことで有名となった。これらの議論は、日本が国際舞台において自覚ある近代国家として新しい役割を担えるよう、日本の指導者たちが尽力していた重要な時期に展開されたのである。

本日の私の発表では、円了の晩期、つまり 1906 年に哲学館と京北中学校の学長

を退任した後の円了の人生に焦点を当てたい。これは円了が「精神修養的公園」として哲学堂を創設した時期である。本論は、哲学堂公園における「精神修養」という概念を、修身の趣旨という観点、哲学の実践的適用のモデルという観点、その立地や環境という観点、儀礼の修練という観点、そして哲学堂の知的資産（特に図書館）という観点、以上の観点から検討する。これらの主題について本論は、哲学や知的歴史という視点からではなく、宗教教育という視点から接近を試みる。明治時代の知的、社会的変革に関しては論点があまりに膨大かつ複雑であり、本日の短い話で十分に斟酌することは出来ない。

そうはいうものの、引退に至るまでの円了の経歴について少々言を割かねばならないだろう。円了が生涯の志を決定したのはかなり若いうちであるように見受けられる。円了は青年の頃より、揺らがない熱意でもって自らの志へと邁進したのであり、彼の意志の基線が彼の最初の業績から発し、中期の経歴を通り抜け、そして哲学堂へと結実する様子は、我々にも鮮やかに見て取られるのである。この基線が最初に姿を現すのは、1885年、東京大学（旧東京大学）在籍時に書かれた「読荀子」という表題の卒業論文である。

読荀子

荀子という漢書を、あの有名な性悪説（23節）だけで知っているという人は多いだろう。言うまでもなく、この説は、中国の主流となる孟子の性善説と対立するものである。円了の論文は、荀子と孟子が共に、論語（17.2）の「性相近、習相遠」（人は本性においては互いに似るが、習慣の中で育つ内に互いに隔たっていく、の意）から派生した僻論（一面的な議論）の表われであると指摘することから始まる（Inoue 1884, IS 25.278）。とはいえ荀子は、人々を欠点のあるものと考えたからこそ次のように主張するのである。即ち、豊かな国（10章：富国）では人民は内に潜む悪い振る舞いを治める為に、一連の教育（1章：勸学）、人格的修養（2章：修身）、儀礼的規範の修練（19章：礼論）に励まねばならない、と。このように議論が展開する理由は、自然の世界は普遍の原理に従っており、儀礼や礼拝の正確な遂行は天の賞罰をもたらすことが出来ないからである（17章：天論）。

円了は荀子に潜む弱点を自由自在に切り捨てるが、円了は同時に、荀子に含まれ

ている教育や自己陶冶のための具体的課題から、多くの着想が得られることを価値として認めている。円了は荀子における課題を解釈する際、これと並行するヨーロッパの学問的な様々な立場を広く参照する。デイヴィッド・ヒューム（1711-1776）の人性論、ジョン・ロック（1632-1704）の経験論（IS 25.731）、ロバート・マルサス（1766-1834）やチャールズ・ダーウィン（1809-1882）（IS 25.738）によって描かれた生存闘争、そしてハーバート・スペンサー（1820-1903）による生存闘争の社会学への援用（社会進化論）（IS 25.739）、と。伝統的教學では、荀子は孔子や孟子の劣った派生とされ、荀子の文献が多くの正しい真理を含むことを無視してきたが、このような伝統的教學を円了は諫めるのである（IS 25.744）。

従って我々は、円了のまさに一番初めの学問的論文のうちに既に、彼の経歴全体を性格づける明瞭な特徴を数多く見出すことが出来るのである。例えば円了は、教育と自己修養の促進、儀式的規範の堅守といった社会的課題を受け入れ、一方で誤った宗教や迷信を拒否する。また、包括性を好み、一面性を拒否する。更に、アジアの伝統的文献を現代の科学的、哲学的諸原理と折衷的に解釈することで、このアジアの文献の現代的意義を擁護する。そして、ヨーロッパより輸入された最新の知識が、アジアの伝統的文献を基礎とした学習に取って代わるどころか、むしろそれを増強し再び活性化する様を示そうと試みるのである。

日本語教育

上記の最後の点は大変重要である。円了は彼の哲学館を大学へと格上げしようと尽力した、というのも彼の思い描いていた学習は、当時の日本に存在した高等教育機関で行われていたものと全く異なる方法のものであったからである。その円了の考えは、次に挙げる彼自身の言葉に最もよく表れている。

わが国には一帝国大学あり、そのほか一、二の私立大学を経画するものあるも、みなその組織は西洋に倣い、その学科は西洋にとり、その教師は西洋に仰ぎ、その用書は西洋を用うる以上は、むしろ西洋の大学というべし。…

ここにおいて、日本主義の大学を設立する必要起こる。その大学は日本固有の学問を基本として、これを輔翼するに西洋の諸学をもってし、その目的とす

るところは日本国の独立、日本人の独立、日本学の独立を期せざるべからず。

…

西洋、東洋の両部ありて、東洋部中には日本学ありシナ学ありインド学あり、日本学中には史学、文学、宗教学、哲学を兼修せしめ、シナ学中には文学、宗教学、哲学を兼修せしめ、インド学中には宗教学、哲学を兼修せしめしなり。

しかして、そのシナ学もインド学も、みなわが国に伝来するものについて教授を施せり。ゆえに、これみなその名は他邦の学なるも、その実わが国の学なり。

(欧米各国: 政教日記, 下編, 1889; 再版: IS 23.147-148)

この学科構成が実際にどう見られていたかについては、ここで大まかな理解を獲得することが出来る。哲学館は、通常学級に登録できなかった学生が受講することの出来る、世界でも最初の教育機関の一つである。哲学館は通信講座という仕方で遠距離学習を開拓したのである (Ogura 1986, 20-23)。この通信講座では、哲学館自身の中で行われた発展講座と同じ水準のものを提供することは出来なかったものの、それでもなお通信講座は一般学級の基本的輪郭を反映している。哲学館の講師達による講義録は、この新しい通信講座の教科書として役立てられた。

哲学館の通信講座向けの教科書は様々なシリーズを通じて発展した。1905年には、通信講座は高等科、漢学科、仏教科の三学科によって構成された (Ogura 1986, 26-29)。高等科は小学校と大学の間位置する、中間レベルの学科に対応する。この三学科のそれぞれの教科書を見ると、それらが隅から隅まで専門化されていることがわかる。漢学科はほぼ独占的に、中国の主要古典文献の読解に向けられている。仏教科は、仏教に関する幾つかの概論と、仏教経典の読解法について説明している伝統的文献の講読との組み合わせによって成り立っている。

講義の教科書

1905年に作られた、学科ごとの教科書のリストは次のようなものである (Ogura 1986, 26-29)。

A、高等科：23の教科書

美学講義
倫理学概論
国語学
支那哲学
最近哲学史
論理学
西洋哲学史補遺
近世倫理学史
心理学概論
日本美術史
社会学
憲法大意
宗教哲学
支那文学
哲学名義考
近世教育学史
日本哲学
認識論提要
倫理学
言語学

B、漢学科：18 の教科書

詩經
論語
老子
孟子
唐宋八家文
唐詩
大学
左伝
日本文典

周易
莊子
荀子
列子
礼記
中庸
韓非子
支那文学史
詩經解題

C、仏教科：19 の教科書

梵語辞典
梵学講義
仏教論理学
仏教理科
仏教倫理
俱舍論講義
仏教心理学
異部宗論講義
唯識論講義
五教章講義
六祖壇經講義
天台宗綱要
秘蔵宝鑰講義
大乘哲学
浄土宗大意
起信論講義
十句義論講義
三論玄義講義
真宗大意

上記の教科書のリストは一時期のものに過ぎず、哲学館の最初の数十年における学科教育の十全な概観となるものではない。とはいえ、この限られた情報からも、言及する価値のある幾つかの重要な点が立ち現れている。

第一に、上に見られる高等科の教科書のタイトルは、ヨーロッパで生まれた大学教育上の基本分野、基本科目を反映しており、これは世界中に広がり、今日でもなお使用されているものである。1905年のわずか50年前では、これらの語彙も方法論も、そして内容も、日本では全く知られていなかった。従って、哲学館でこれらの教育が行われたことは、日本国家と日本人が世界的な知の交流に参加していく過程での重要な一幕となったのである。

第二に、漢学科の教科書と、一部を除く仏教科の教科書のタイトルは、伝統的注釈に即して古典を読解する、という伝統的な学習様式を反映している。この教育の様式は百年間変わっておらず、この様式はアジアに限らず、古典研究の伝統が残っている地域では今日でも総じて維持されている。

第三に、高等科と仏教科の幾つかの教科書が、全く新しい発展を見せている。中国哲学と日本哲学のテキスト、そして仏教論理学、仏教理科、仏教倫理、仏教真理といった仏教テキストは、新しい知の混合領域を形成している。海外より輸入した語彙、方法論、概念を使用しながら、既存の伝統を再概念化し、再配置し、再解釈するという仕方で、これらの新領域は新しい学問主題を作り上げたのである。この新領域によって諸々の伝統は、海外世界とだけではなく、現代日本の新しい世界観との対話にも持ち込まれることとなった。今日の我々にとっては意外なことかもしれないが、この新しい学的領域の内容が先行世代には受け入れられないものであったらうことは想像に難くない。新しい仏教思想、新しい仏教研究が生まれたことで、過去の世代との決裂が生じもしたのである。

哲学館事件

1902年に、哲学館は最も深刻な攻撃に晒されることとなる。というのもその年、卒業試験に含まれていた弑逆についての設問への学生の回答を、文部省の検定が問題視したのである。この試験問題は英国の哲学者ジョン・H・ミュアヘッド（1855-1940）の『倫理学』（1892）の一節を引用したものである。文部省は学生の回答の

みならず、英国人の文献を使用した試験問題や、哲学館の倫理教育の方法そのものも問題視した。文部省は、哲学館に、廃校ないし教育方針の変更を迫ることとなる。この事件はすぐさま公の議論に上り、最終的には文部省は廃校の勧告を取り下げるものの、哲学館が卒業生に教員免許を認可する資格を、この先五年間にわたって停止させたのである。

哲学館事件は重要な主題であるが、ここでは詳論することが出来ない。但し、政府の監視の中で哲学館が復興に向けて尽力したこの時期を経て、円了が徐々に疲弊し消耗していったという事実だけは指摘しておきたい。この事件はやはり円了の人生の転機となったのである。続く 1903 年、円了は修身教会という自己修養のための教会を設立し、その一年後の 1904 年、文部省は哲学館を大学へと拡張することを認可する。同年に円了は、大学認可の記念として、また哲学館事件の記念として、哲学堂公園を設立する。円了は徐々に神経的疲労に悩まされることとなる。そしてついに 1906 年に、円了は哲学館大学学長の座を退くこととなるのである。精神的修養のための公園である哲学堂は、円了の引退生活の中心にして、彼の修身教会の中心となった (Morikawa 2005, 34)。

修身教会

現代人のために、まずは「教会」と「修身」という語の説明が必要であろう。今日の多くの人、特に日本国外から日本社会を研究している人は、「教会」という語を、特に宗教組織としてのキリスト教と結び付ける傾向にある。日本について英語で論じる研究者の間では、「教会」という語がキリスト教を、「寺」が仏教を、「神社」が神道を意味するというのは共通認識となっている。これに加えて、修身という語は多くの人々の心の中で、1930 年代から 40 年代にかけての、超国家主義的イデオロギーの下での刷り込み教育と同義語となってしまっている。このような事情で、問題の二つの語は本論が取り扱っている時代には今のような意味合いを持っていなかった、ということに注意しておく必要があるのである。

英語の「church」の訳語である教会（文字通りには、教える会）という語は、公共の目的のために形成された道徳的共同体、という社会学的な意味を持つものであり、この語は明治時代、特に日本仏教において、出家した僧侶を中心とした宗教組

織とは異なる、新しい在家（社会人）中心の組織を意味するものとして広く使われていた（Ikeda 1976 and 1998）。つまり、円了にとっても「教会」という語は、僧侶主導ではない一般人組織を含意していたのである。

「修身」という語は、おおもとは儒学における概念を意味する。この語は『大学』の冒頭章の鍵語である。「自天子以至於庶人、壹是皆以修身為本（天子より以て庶人に至るまで、壹是に皆な修身を以て本と為す）」。

明治初期、アメリカ人教育学者フランシス・ウェイランド（1796–1865）の高名な教科書『道徳科学』（1835）に登場する「道徳科学 moral science」という概念を訳する際、福沢諭吉（1835–1901）がその訳語として「修身」を採用した。道徳に対する福沢の方法論は、1900年に『修身要領』として出版される。この小論は個人の独立自尊、そして男女平等などを基礎にした道徳を強調したという意味で特筆に値する。福沢は修身という語を儒教的視点の促進のために使ったのではなかったし、ましてや超国家主義的な意味で使ったのではなかった。円了の時代でも、修身という概念は何かお決まりの趣旨を担うものではなかった。この語は、言わば内容的規定のないまま曖昧に使われていたのである。

恐らく円了自身も「修身教会」という語に不安を感じていたのではないだろうか。理由は定かではないが、後に円了はこの組織を、国民道徳普及会という名に改めている。

実践哲学

円了は修身と道徳の促進活動を、哲学の実践的適用、実行として思い描いていた。1915年の『哲学堂案内』において円了は西洋哲学について、「西洋の哲学は理論一方に偏して実行方面を疎外せる」と説明する。そして、「哲学の極致は実行にあり」（附録 p. 8）と円了は述べる。円了は、哲学は実践的問題への適用を学ぶことでこそ最もよく身に付くものであると主張し続けるのである（「実行問題を研究するやうに」）。これこそが、哲学堂と名付けられた修身のための公園の、その目的なのである。円了の説明によれば、哲学堂は外見的には宗教的な特徴を持つものの、内面的には今日存在する宗教とは異質のものである。その違いは、宗教は信念に由来するが、哲学は知に由来する、という点にある。「換言すれば仰信と理信との差別

ある」(附録 pp. 11-12)。

この『哲学堂案内』の中で円了は、哲学が適用されるべき何らかの特定の実践的問題を挙げることはしない。『修身教会要旨』(1906)によれば、それぞれの問題がそれぞれに公共的な善を担うことは明らかである。円了が言うには、日本の急速な経済的、政治的発展は、徳や義心の広範な衰退を伴うものであった(p. 1)。日本の学校の科目は道義徳行の原理についての授業を確かに持つてはいるものの、その授業は余りに単純で、その涵養に足りるものではない。しかも、学校の他には、家族、社会的組織、宗教的組織、どれを見ても、道徳的規範を与えるものは存在しない(pp. 3-5)。円了の説明によれば、仏教寺院は道徳的指導をすることがない、というのも彼らは常に死後の生を指向し、生の問題を無視するからである。また、日常の問題に彼らが口を出せば、まじないをするばかりで、そうして人々を迷信へと導いてしまう(pp. 7-8)。このような状態だからこそ、新しい方法論が必要となるのである。

1909年から1918年にかけて、円了は修身教会という彼の考えを広めるために、日本中を股にかけた講演旅行を行う。哲学堂で作り上げられたモデルに即して、あらゆる町や村で一般人の組織が自発的に形成されることを円了は望んだのである。円了は講演の主題や聴衆に関して細かい記録を残していた。この時期で、彼は130万人を超える民衆に話をしたことになる。彼の講演は次のような主題を取り上げていた。教育勅語(41%)、幽霊や迷信(24%)、哲学と宗教(15%)、教育(8%)、産業と経済(7%)、他(5%) (Miura 2011, 80)。これらの主題の配分に、哲学が関与するべきと円了が考えた実践的問題の種類が表れている、と考えることも出来るだろう。

また同時に、哲学の実践的適用に対する円了の視座が、様々な主題や問題領域の境界を越えて広がっている、ということにも注目すべきであろう。実践的適用に関して、円了は哲学の主題だけでなく、その形式や文脈にも言及する。彼は哲学に、人々が目にし、触れることの出来るようなありありとした実在性を与えたかったのである。彼の哲学堂公園も、哲学に具体的な環境を与えるものである。身体的な儀礼の実践も、図書館という形での知的資産もその一環である。

環境としての哲学堂

円了は哲学を公園として指定した。このようにした理由を彼は明確に説明してはいない (Ideno 2011)。哲学堂を創設した 1904 年には、公園というものは日本では珍しかった。1873 年に政府は日本初の公園を作ったが、これは仏教寺院の敷地を没収して作られたものである。東京では、この施策によって上野公園 (寛永寺の敷地)、浅草公園 (浅草寺の敷地)、芝公園 (増上寺の敷地) といった公園が作られた訳である。

日本の最初の公園が仏教寺院に由来したという事実からも、仏教寺院が伝統的に、景勝地としての、また行楽地としての役割を果たしていたことがわかる。仏教の敷地を示すサンスクリット語の単語「vihāra; ārama」も、実際には庭、行楽地といったことを意味している (Schopen 2006)。東アジアの寺院や僧院でも同様に、鶴苑、僧園、鹿苑、清浄園、禅林などといった、上述のものと似た様々な名前を目にすることが出来る。更には仏教経典の中にも、寺院は美しく、装飾品と美しい建築を持つべきだという教えがある。建物は「彩画」や「形像」で装飾されているべきである。寺院が持つ装飾や行楽の性格は僧侶のために向けられたものではなく、一般人を引きつけて讚嘆させることを狙って設計されたのである (Soper 1950; Schopen 2004 and 2006)。

今日の日本では、このような状況が大量に保持されているのを確認することが出来る。日本には多くの仏教寺院が存在し、これらは行楽地となっていて、人々はその庭園で憩い、その建築に目を見張るのである。これは昔からそうであった。だからこそ、例えば、宇治の平等院鳳凰堂の壁面に最古の大和絵の風景画 (1053 年前後) が保存されている、といったことがあるのである。また、仏教寺院やその中の様々な建物の名前にはしばしば、仏教経典に書かれた仏教的概念が表れている (例えば「平等」)。

円了も哲学堂公園をこれと同じ姿勢で作り上げたのである。しかし、円了の場合、「哲学堂」という名前は明らかに別種の方角を指し示している。円了は公園内に配置された 77 の場に、仏教経典ではなく哲学論文から取った名前を割り当てる。一方には「唯物園」という庭があり、別の方向には「唯心庭」という庭がある。そして前者には「経験坂」、「神秘洞」、「進化溝」が存し、後者には、「直覚径」、「心理崖」、「倫理淵」がある。円了がこのような名称を考案したのは、人々が「名目を

一々説明すれば、哲学の大意が分かる」(1913, rpt. IS 2.73) ように、であると円了自身は主張している。

このような命名法の最たるものが、四聖堂である。これは、円了の考えるところの、東洋と西洋、古代と現代の哲学世界全体を代表する四人の哲学者のための聖堂である。つまり、釈迦、孔子、ソクラテス、そしてイマニエル・カントである。

円了がこの四人の哲学者を選び出したのは、哲学堂公園の創設を決定するずっと以前、彼の経歴の極めて早い段階のことであった。この四人の哲学者を合わせることで、円く(円)、そして完全な(了)哲学という円了の考えが象徴化される、という訳である(Godart 2004, 121-122)。この四賢者についての最も良い説明となるのは、円了が1890年に著した『星界想遊記』(他の惑星への空想旅行記)である。これは仕事の世界(商法界)、女性の世界(女子界)、老人の世界(老人界)、科学の世界(理学界)などといった想像世界へと赴く夢の旅を描く創作であるが、最後にこの旅は哲学の世界(哲学界)を訪れることで結びとなる。この世界で語り手はまず釈迦と出会い、次いで孔子、ソクラテス、カントが、釈迦の分身として出現する。四賢者は順々に、彼らが我々の世界に届けたかった言葉を語るのである。

釈迦牟尼曰く「… 汝の世界は苦界なり。しかれども、その苦はすなわち楽界に達する道なり。請う、汝記せよ、苦は楽岸に達する船なることを… 衆に告げよ。」

孔夫子(孔子)もまた曰く、「われ、汝の本土にありしとき、世道人心の治まらざるを見て、修身齊家の道を講じ、仁義道德の大本を説きしが、その後、人民私利に走り小欲に汲々として、大道を忘るるに至れり… 道德の家には幸福の園池あることを。人、もし幸福の園池に遊ばんと欲せば、必ず道德の家に入るべし… 」

墳夫子(ソクラテス)また曰く、「われ、汝の世界にありしとき、時弊を矯正せんと欲し、知徳の本体を明らかにして、これを研修するの必要を説けり。汝、よろしくわがためにその道を広むべし。」

韓夫子(カント)、終わりに一言して曰く、「われ、世の学者の論みな一方に偏する弊あるを見て、これを総合対照し、中正完全の哲学を起こせり。汝、よろしくわが志を継ぎて、今日の学弊を矯正すべし。」

(星界想遊記, 1890; 再版 IS 24.61-62)

この四人の哲学者を祭る聖堂を哲学堂公園の中心に据えることで、円了は、なるほどまごつかせるものはあるかもしれないが、哲学的な命名と哲学的課題とを合体させて示したのである。四人の哲学者はそれぞれ、その時代の問題点を正し、人々をより良い未来へと導くという同じ目標を追求していた。人々は、哲学用語に満ちたこの公園の環境に置かれることによって、この四人の哲学者の言葉を理解するよう導かれ、この四人の哲学者の力で人々は欠ける所のない完全な哲学へと導かれるのである。

儀礼の修練

哲学は実践的側面（実行方面）を持たねばならないと円了は主張したが、この時に円了が考えていたものには、実践的な問題へと携わることだけでなく、人々の哲学への結びつきを強めるための儀礼の実践も含まれていた。例えば、四賢者の聖堂は、哲学への尊敬を示す儀式を執り行うことの出来る聖堂として設計されている。とりわけこの聖堂は、毎年10月27日に開催される、四人の哲学者を記念しつつ、哲学の理念へと献身するための式典の場とされた。円了はこの記念式典の第一回を1885年に開催した。そして、1897年までこの行事を文章化して、その1897年度の文章を繰り返し出版した。その文章は次のようなものである。

後学円了ら謹んで四聖の尊像を講堂に掲げ、『大学』『中庸』『論語』『易経』『法華経』『浄土三部経』『ソクラテス伝記』『純理批判哲学』各一部をその前に供し、仰いで尊容を拝し、俯して遺教を思い、もって先聖、釈迦、孔子、ソクラテス、カントの四大家を祭る。釈迦はインド哲学を代表し、孔子はシナ哲学を代表し、ソクラテスはギリシア哲学を代表し、カントは近世哲学を代表す。故に四聖その人を祭るは、哲学そのものを祭るゆえんなり。

それ哲学は一種の別世界にして、その中に天地あり、日月あり、風雨あり、山海あり。釈迦の知はそのいわゆる日月なり。孔子の徳はそのいわゆる雨露なり。ソクラテスの識はそのいわゆる山岳なり。カントの学はそのいわゆる海洋なり。その知はわれを照らし、その徳はわれを潤し、その識はわれを護し、そ

の学はわれを擁し、わが父となり、わが母となり、君主となり、師友となり、日夜われを愛育撫養せり。

ここをもって不肖円了ら、幸いに哲学界の一人となるを得たり。我が輩あにその恩を報謝せざるべけんや。 …

我が輩すでに先聖の撫育によりて、一個の成童となるを得たれば、これよりわが先聖に対する義務として、更に後進の子弟を啓導して、この哲学界裏に誘入し、これをして別天地の風雲山海の間に迫遙沐浴せしめざるべからず。これ不肖円了らが本年より、年々哲学祭を設けて、その学の将来、ますます振起発達せんことを祈るの微意にして、すなわち四聖その人を祭るのみならず、哲学そのものを祭るゆえんなり。

(南船北馬集 3, 1909; 再版 IS 12.554-555; also see 哲窓茶話, 1916; 再版 IS 2.110-111)

この式典の参加者は四人の哲学者に敬意を払い、哲学の促進へと身を捧げる。少なくとも円了にとってはこの儀式的行為の中に、上述の『星界想遊記』で書かれていたような四人の哲学者の知的課題へと身を捧げることが含まれているのである。

このような務めへの力を得るために、円了は「南無絶対無限尊」という言葉を唱えることを奨励する。この言葉の中で人は、実在の究極的真理という絶対無限へと、儀式的に帰依することとなるのである。このように言葉を唱えることは、「南無阿弥陀仏」といった仏教の念仏をモデルとしたものであるが、神仏への明確な祈りとなることは避けている（次を参照。Inoue 1917; rpt. IS 2.440）。円了はこの言葉とその働きについて、次のように言う。

余思ふに哲学の極意は、理論上宇宙真源の実在を究明し、實際上其本体に我心を結托して、人生に楽天の一道を開かしむるに外ならず、此に其躰を名けて絶対無限尊といふ、空間を究めて涯なきを絶対とし、時間を尽くして際なきを無限とし、高く時空を超越して而も威徳廣大無量なるを尊とす、之に我心を結托する捷徑は、只一心に南無絶対無限尊と反復唱念するにあり、人一たび之を唱念するときは、忽ち鬱憂は散し、苦悩は滅し、不平は去り、病患は減し、百邪の波はおのずから鎮まり、千妄の雲は自然に収まり、立ろに心界に楽乾坤を開き、性天に歡日月を現じ、方寸場頭に真善美の妙光を感得するに至る、之と同

時に宇宙の真源より煥発せる偉大なる靈氣が我心底に勃然として湧出するに至る、其功德実に不可思議なり
(哲学堂案内 1915, 11)

知的資産

円了の哲学堂公園の設計における決定的に重要な要素は、図書館である。『修身教会要旨』(1906, p. 14)にて円了が述べるところでは、新聞、雑誌、書籍に身近に触れる機会を設けることは、知識を増進させるだけでなく精神的修養にとっても主要な役割を演じる。円了は地方の教会にも、図書館は無理だとしても読書室を設備するよう勧め、また哲学堂公園には読書室以上の設備を作った訳である。円了は、大学を卒業した1885年以来収集してきた個人的蔵書をこの図書館に贈呈した。1916年には、円了は図書館の蔵書の詳細な目録を編集し、後にこれを、図書館利用者が順守すべき一連の規則と合わせて出版した。

1916年の円了の図書目録の概要は、本論の末尾に付録として添付している。この蔵書は大きく分けて二つの分野、即ち(a)日中両国の非仏教書籍(国漢書)、そして(b)日中両国の仏教書(仏書)とに分かれている。両分野とも、その内容は一万冊を越える(円了の報告では合わせて21,193冊であるが、私のまとめたデータでは21,227冊となっている)。この蔵書は、日本において古くから教えられてきたアジアの学問(日本、中国、インド)の全領域を網羅しつつ整理されている。これらの書籍は無分別に収集されたものではない。目録をよくよく精査すれば、極めて体系的な整理のもとに書籍が選定されていることが見て取れよう。実に、この蔵書には主要著作の全てと、それぞれの主題、分野についての重要文献の大半が収録されているのである。

蔵書の膨大さと整理のされ方の他に、この図書館に際立った性格があるとしたら、それはこの図書館が古書、古典のみを蔵書しているという点であろう。参考書籍や仏教経典の縮刷版といった数冊の例外はあるのだが(item B-50; Fukuda et al. 1880-1885)、それ以外の蔵書は総じて1868年の明治維新以前のものとなる。この形は、円了が哲学館大学で行ったものとは全く異なる、というのも哲学館大学では、新たに輸入された西洋の学問的分野を既存の伝統的アジア学と結び付けたのである。ち

なみに、この図書館は「哲学堂」という名の公園の中にありながら、そこに「哲学」という語を含む書籍は一冊たりともない。何故ならば、この「哲学」という用語は1868年以後、日本が西洋文化へと開かれてから作られたものだからである。この図書館の蔵書は明治以前のもののみであり、またこれが体系的にまとめられているため、ここから我々は、近代以前の日本の伝統的学習法に使われた書籍の構成についての概要を得ることが出来る。これは大変希少で、そしてある意味で大変価値のあるものである。もしくは、低く見積もっても、世紀の変わり目という時代に、井上円了という高等教育を受けた一人の知的人間がどのような種類の書籍を集めることが出来たのかが、ここには示されている。

蔵書のほぼ全ては印刷物である。印刷技術は日本でも長い歴史があるものの、大規模な出版業は17世紀中盤まで根付くことはなく、それ以降になって出版物は急速に広まったという (Berry 2006)。それでも、哲学堂の蔵書には手書きの写本が含まれており、非仏教書籍の約3%と仏教書の約6%は写本である。写本文化はとりわけ仏教者の間では一般的であったようである。手書きの写本は、仏教的な問題領域に存在し、特に梵学、俱舎、法相の領域では膨大な量が存在する。非仏教的領域では、神教、政治、歴史、怪談、随筆といった分野で写本が見受けられる。

蔵書の多くは日本で印刷されたものであるが、非仏教書籍の一部(16%)は中国から輸入されたものである。これらの書籍は第一に中国の儒者によって書かれた中国古典であり、歴史、文学作品集、中国文献学に関する清朝の作品などがある。このような作品が存在するということから、中国の刊行物が長い間、日本の学生に影響を与え続けてきたことが示されよう。しかし、仏教に関しては事情が全く異なる。仏教書籍で中国から輸入されたものは殆ど存在しない。作者や訳者が中国人であったとしても、その印刷は日本で行われたのである。

円了は、学術的重要性に関する彼自身の判断に基づいて目録の分類を定めており、最も基礎的な作品を先頭に配置している。例えば非仏教書籍では、神と神話についての書籍が先頭で、これに次いで中国古典と儒学書が来る(付録を参照のこと)。我々で分類を再整理し、冊数の多いものから順に並べるとするならば、下記の表のような全く別の順序となる(選集、目録、参考図書などは除外した)。

哲学堂図書館目録、パート A:

日中非仏教書籍 (国漢書)

分野ごとの冊数順

分類番号	分野	作品数	総冊数
19-21	史傳部 (中国)	62	925
3-4	經書部 (中国)	134	891
16-18	史傳部 (日本)	65	789
41-43	隨筆部	134	622
22-25	文學部 (日本)	138	621
27-30	文學部 (漢文)	120	595
38-40	怪談草紙部	160	576
6-8	儒書部	118	454
11-12	兵書部	46	423
1-2	神教部	111	384
33-34	修身道話部	164	375
26	文學部、小説 (和漢)	23	342
5	諸子部	54	271
31-32	文學部、漢詩	84	253
13	政治、經濟	33	168
9	醫書及本草部	41	165
15	地理、旅行	34	160
14	地学、氣象	53	136
10	長命法、健康法	29	125
37	美術、工芸	33	100
44	雜学	27	56
36	相法卜筮部	27	48
35	民間讀本部	37	45

200 冊以上の書籍を含む分野は次のようになる。中国の歴史、伝記 (925 冊)、中国古典 (891)、日本の歴史、伝記 (789)、日本文学 (621)、日中の隨筆 (622)、中国語の日中文学 (595)、日中の怪談 (576)、日中の儒学書 (454)、軍事、戦記 (423)、宗教神学 (384)、日中の道徳的逸話 (375)、日中の小説 (342)、古代中

国諸作家 (271)、日中の漢詩 (253)。上記の表には 14 の分野があるが、そのうちの 10 の分野 (約 70%) で、書籍の全てなり一部なりが中国語である。このように中国文学が優勢であるのは、円了の極めて特殊な知的背景と関心を明らかに反映している。というのも八歳の始めより円了は、中国古典や儒学書の読解のための手厚い教育を受けてきたのである (Morikawa 2005, 20-21)。また、円了は生涯を通じて、自分の想いを表現するのに漢詩を用いている。中国文学が彼にとって極めて重要であったことは明らかである。

とはいうものの、私の見解では、このような中国文学の優勢は明治以前の日本での中国教育の重要性を忠実に反映しているのではないか。1868 年以前に書かれた日本の文章は、日本語で書かれているものを含めて、中国の歴史や、中国の偉人の詳細な伝記的事実に頻繁に言及しており、中国古典に由来する語彙や概念を頻繁に使用している。このような種類の知識は、今日では、日本の前近代史についての教授の間ですら、そう馴染まれたものではないし、少なくとも米国の教授の間ではそうである。そのような意味で、哲学堂図書館の蔵書によって我々が痛感させられるのは、伝統的日本文化の多くが——そしてとりわけ、中国思想を日本で受容し解釈したものの多くが——今日の我々には最早そう簡単に近づくことの出来ないものになっている、という事実である。

仏教書についても前と同じ基準で、冊数の多い順に再配列するならば、次のようになる (同様に、選集、参考図書は除外した)。

哲学堂図書館目録、パート B:

日中仏教書 (仏書)

分野ごとの冊数順

分類番号	分野	作品数	総冊数
12-21	大乘經釋部	508	2,573
35-38	淨土部	312	921
3-5	史傳部	183	736
24-27	天台部	517	689
30-32	眞言部	174	687
22-23	法相部	113	574
9-11	戒律部	184	455

33-34	禪家部	192	453
7-8	小乗俱舎部	59	360
39	日蓮部	70	275
41-42	論議部	115	257
28-29	華嚴部	87	239
45	通俗部	73	234
43	詩文部	50	185
44	隨筆部	45	182
46	雜書部	101	168
1	梵學部	56	124
6	外道 <small>及</small> 小乗諸宗部	53	92
24	三論部	23	71
40	餘宗 <small>及</small> 八宗ノ部	32	65
2	因明部	26	58

この諸分野は 200 冊を超え、その内容は順に、次のようになる。大乘仏教の經典と注釈 (2,573 冊)、淨土 (921)、歴史と伝記 (736)、天台 (689)、真言 (687)、法相 (574)、律 (455)、禪 (453)、俱舎 (360)、日蓮 (275)、論議 (257)、華嚴 (239)、通俗部 (234)。上記の表には 13 の分野があり、全ては中国語の書籍を主としている。ここでも確認される分野や宗派の優勢は、やはり円了自身の固有の背景を反映したものと見えよう。円了は淨土真宗の家に生まれており、このことから淨土部の蔵書数が大乘經釋部に続き二番手につけているのは納得の行くことである。

しかし、改めて感じるのは、上記の順位が私自身の抱く印象と大変近いということである。私の印象というのは、当然ながら未完成のものではあるが、上記の分野が日本の宗教史と相関関係にある、というものである。現に淨土仏教は、歴史の中で様々な仕方で日本に広範な影響を及ぼした。上の表では、淨土の後に天台、真言、法相が続いている。これらの宗派に所属する寺院は門跡〔皇族、貴族が住職を務める寺院のこと、またその高位の寺格〕の地位にあった（天台宗、真言宗、法相宗は中世において、そして淨土宗を含めた四宗は近代初期において）。言い方を変えれば、これらの宗派は支配階級との密接な結びつきを持ちつつ、伝統的文化の中心に極めて強い影響を及ぼしていたのである。また、論議書の多さも特筆に値する。こ

れは日本仏教の強固な宗派主義と、宗派間の頻繁な論争とを示す証拠となるものであるのだが、この論争が日本仏教の歴史を特徴づけてもいるのである。

上記の諸分野は、更なる日本仏教固有の特徴を示している。インド、中国、朝鮮、チベットにおいては、三論学派の文献の方が法相よりも影響力を持っている。しかし日本ではこの事情が逆転している。法相は日本仏教、更には日本の知の歴史や宗教史の中で主要な役割を演じているのである。同様に、中国と朝鮮では華嚴が天台よりも影響力を持っているように見受けられるが、やはり日本では事情が異なる。1868年より前、天台学派は日本仏教の主流の一つであり、華嚴の陰に隠れるようなことは決してなかったのである。

以上のような統計的な比較では、実際のところ、哲学堂図書館の蔵書の持つ最も価値のある面を見逃してしまっている。即ち、この図書館の所蔵する多くの書籍、特に仏教書は極めて希少であり、その多くは現在も再版されておらず、日本国内にごく少数の複写が存在するのみなのである。そのため、明治以前の日本文化や歴史を研究する場合、幾つかの特定の主題に関して、この哲学堂図書館を参照することが不可避となるのである。もちろん、円了が明治時代の書籍をこの図書館の蔵書から除外した正確な理由は我々にはわからない。しかしながら、円了が「日本固有の学問」を保護し推進することを望んでいたということは、我々にもわかることである。この図書館を保存したことで円了は、少なくとも、後の世代に、この日本固有の学問を修めるための可能性を確保したことになるのである。

最後に、個人的報告をもって本論の結びとしたい。私が本日の発表に向けた研究を行うことができたのも、ひとえに、東洋大学学術情報リポジトリ (<https://toyo.repo.nii.ac.jp/>) による井上円了選集へのオンラインアクセスのおかげである。この素晴らしいサービスに心より感謝を申し述べたい。

とはいえ、私がここで示唆したいのは、井上円了の残した真の遺産は彼自身の著作だけにあるのではなく、彼が哲学堂図書館に保存した書物にも目を向けるべきである、ということである。東洋大学図書館が既にこの蔵書をマイクロフィルム写真にして保存している。東洋大学学術情報リポジトリでこれらの写真へのオンラインアクセスが実現されれば素晴らしいことだろう。

参考文献

- Berry, Mary Elizabeth. *Information and Nation in the Early Modern Period*. (Japan in Print: Berkeley: University of California Press, 2006)
- Fukuda Gyōkai 福田行誠, Shimada Bankon 島田蕃根, and Shikikawa Seiichi 色川誠一, eds. *Dainippon kōtei dai zōkyō* 大日本校訂大藏經. [*Shukusatsu daizōkyō* 縮刷大藏經.] 418 vols. (Tokyo: Kōkyō Shoin 弘教書院, 1880–1885)
- Fukuzawa Yukichi 福澤諭吉. *Shūshin yōryō* 修身要領. (Tokyo: Jiji Shinpō 時事新報, 1900) (Available on-line at Aozora Bunko 青空文庫: <http://www.aozora.gr.jp/cards/000296/card47063.html>)
- Godart, Gerard C. "Tracing the Circle of Truth: Inoue Enryō on the History of Philosophy and Buddhism." in *The Eastern Buddhist, new series*, 36, nos. 1–2, 2004, 106–133.
- Godart, Gerard C. "'Philosophy' or 'Religion'? The Confrontation with Foreign Categories in Late Nineteenth Century Japan." in *Journal of the History of Ideas* 69, no. 1, 2008, 71–91.
- Hall, Robert K. *Shushin: The Ethics of a Defeated Nation*. (New York: Teachers College, Columbia University, 1949)
- Ikeda Eishun 池田英俊. *Meiji no Shin Bukkyō undō* 明治の新仏教運動. (Tokyo: Yoshikawa Kōbunkan 吉川弘文館, 1976)
- . "Teaching Assemblies and Lay Societies in the Formation of Modern Sectarian Buddhism." in *Japanese Journal of Religious Studies* 25, nos. 1–2, Translated by Clark Chilson, 1998, 11–44.
- IS. *Inoue Enryō senshū* 井上円了選集. Edited by Tōyō Daigaku Sōritsu 100-shūnen Kinen Ronbunshū Hensan Inkaikai 東洋大学創立 100 周年記念論文集編纂委員会. 25 vols. (Tokyo: Tōyō Daigaku 東洋大学, 1987–2004) Abbreviated as "IS." (available on-line at Tōyō Daigaku Gakujutsu jōhō Ripojitori 東洋大学学術情報リポジトリ: <https://toyo.repo.nii.ac.jp>)
- Inoue Enryō 井上圓了. "Toku Junshi" 讀荀子. in *Gakugei shirin* 學藝志林. Reprint IS 25, 1884 (2004), 727–744.
- Inoue Enryō 井上圓了. *Tetsugaku isseki wa* 哲學一夕話. Reprint IS 1, 1886 (1987), 33–84.

- Inoue Enryō 井上圓了. *Bukkyō katsuron joron* 佛教活論序論. Reprint IS 3, 1887 (1987), 327–393.
- Inoue Enryō 井上圓了. *Ō-Bei kakukuni: seikyō nikki* 歐米各國: 政教日記. Vol. 2. Reprint IS 23, 1889 (2003), 95–153.
- Inoue Enryō 井上圓了. *Seikai sōyūki* 星界想遊記. Reprint IS 24, 1890 (2004), 21–63.
- Inoue Enryō 井上圓了. *Bukkyō tetsugaku* 佛教哲學. Reprint IS 7, 1893 (1990), 107–181.
- Inoue Enryō 井上圓了. *Shūshin kyōkai yōshi* 修身教會要旨. (Tokyo: Tōyō Daigaku 東洋大學, 1906) (available on-line at Kindai Dejitaru Raiburārī 近代デジタルライブラリー: <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/756373>)
- Inoue Enryō 井上圓了. *Nansen hokubashū* 南船北馬集. Vol. 1. Reprint IS 12, 1908, 189–307.
- Inoue Enryō 井上圓了. "Shūkyō tōzai no ōzumo" 宗教東西の大相撲. in *Shūkyō taikan* 宗教大観. (Nagano: Butto Shinōsha 佛都新報社, 1908), 60–62. (available on-line at Kindai Dejitaru Raiburārī 近代デジタルライブラリー: <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/814880>)
- Inoue Enryō 井上圓了. *Nansen hokuba shū* 南船北馬集. Vol. 3. Reprint IS 12, 1909, 451–592.
- Inoue Enryō 井上圓了. *Tekkai ichibetsu* 哲界一瞥. Reprint IS 2, 1913 (1987), 65–88.
- Inoue Enryō 井上圓了. *Tetsugakudō annai* 哲学堂案内. Rev. 3d ed. (Tokyo: Tetsugakudō Jimusho 哲学堂事務所, 1915 (1920)) (available on-line at Kindai Dejitaru Raiburārī 近代デジタルライブラリー: <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/964813>)
- Inoue Enryō 井上圓了. *Tetsugakudō Toshokan tosho mokuroku* 哲学堂圖書館圖書目錄. (Reprint. Tokyo: Tōyō Daigaku fuzoku Toshokan 東洋大学附属図書館, 1916 (1985))
- Inoue Enryō 井上圓了. *Tessō chawa* 哲窓茶話. Reprint IS 2, 1916 (1987), 91–204.
- Inoue Enryō 井上圓了. *Funtō tetsugaku* 奮闘哲學. Reprint IS 2, 1917 (1987), 207–444.
- Ideno Noaki 出野尚紀. "Tetsugakudō hakkei" 哲学堂八景. in *Inoue Enryō Sentā Nenpō* 井上円了センター年報 20, 2011, 119–146.

- (available on-line at Tōyō Daigaku Gakujutsu jōhō Ripojitori 東洋大学学術情報
リポジトリ: <https://toyo.repo.nii.ac.jp>)
- Ideno Noaki 出野尚紀. "Tetsugakudō kaien made no kōen yōsō" 哲学堂開園までの公園
様相. in *Inoue Enryō Sentā Nenpō* 井上円了センター年報 21, 2012, 87-116.
(available on-line: <https://toyo.repo.nii.ac.jp>)
- Kawasaki Shinjō 川崎信定 [alt. 川崎信定]. "Nihon bukkyō kindaika to gakuso Inoue
Enryō sensei no Tōyō toshokan kōsō: zassetsu to sono chōkoku" 日本仏教近代化と
学祖井上円了先生の東洋図書館構想: 挫折とその超克. in *Bukkyō toshokan
kyōkai kenshūkai kōen, kōgiroku* 佛教図書館協会研修会講演・講義録 10, 2005,
411-422. (available on-line at Bukkyō Toshokan Kyōkai 佛教図書館協会:
<http://bukkyo-toshokan.jp/activity/study/10.html>)
- Martin, Dale. *Inventing Superstition: From the Hippocratics to the Christians*.
(Cambridge: Harvard University Press, 2004)
- Miura Setsuo 三浦節夫. "Inoue to chosaku: Inoue Enryō ryaku nenpu, Inoue Enryō
chosaku mokuroku, 'Inoue Enryo senshū' mokuji" 井上円了と著述: 井上円了略
年譜・井上円了著述目録・『井上円了選集』目次. in *Inoue Enryō Sentā Nenpō*
井上円了センター年報 13, 2004, 71-106.
(available on-line at Tōyō Daigaku Gakujutsu jōhō Ripojitori 東洋大学学術情報
リポジトリ: <https://toyo.repo.nii.ac.jp>)
- Miura Setsuo 三浦節夫. "Inoue Enryō to tetsugakudō kōen 100 nen 井上円了と哲学堂公
園一〇〇年. in *Inoue Enryō Sentā Nenpō* 井上円了センター年報 20, 2011, 53-
134. (available on-line: <https://toyo.repo.nii.ac.jp>)
- Morikawa Takitarō 森川 滝太郎. "Jiseki ga shimesu Inoue Enryō no ito" 事績が示す井
上円了の意図. in *Inoue Enryō Sentā Nenpō* 井上円了センター年報 14, 2005, 19
-39. (available on-line: <https://toyo.repo.nii.ac.jp>)
- Muirhead, J[ohn]. H. *The Elements of Ethics: An Introduction to Moral Philosophy*. (New
York: Scribner, 1892) (available on-line at the Internet Archive:
<http://archive.org/details/theelementsofeth00muiruoft>)
- Nakano-ku 中野区. *Tetsugakudō Kōen Hozon Kanri Keikaku (An)* 哲学堂公園保存管
理計画 (案). (Tokyo: Nakano-ku Toshi Kiban-Bu Doro Kōen Kanri Bun'ya
中野区都市基盤部道路・公園管理分野, 2012)

- Ogura Takeharu 小倉竹治. *Inoue Enryō no shisō* 井上円了の思想. (Tokyo: Azekura Shobō 校倉書房, 1986)
- Okada Masahiko 岡田正彦. "Revitalization versus Unification : A Comparison of the Ideas of Inoue Enryō and Murakami Senshō," in *The Eastern Buddhist* 37, 2005, 28–38.
- Okada Masahiko 岡田正彦. "Kindai Nihon no yūtopia shisō to aikoku shugi: Inoue Enryō 'Seikai sōyūki' o yomu" 近代日本のユートピア思想と愛国主義 : 井上円了『星界想遊記』を読む. *Inoue Enryō Sentā Nenpō* 井上円了センター年報 20, 2011, 47–73. (available on-line: <https://toyo.repo.nii.ac.jp>)
- Schopen, Gregory. "Art, Beauty, and the Business of Running a Buddhist Monastery in Early Northwest India." in *Buddhist Monks and Business Matters: Still More Paper on Monastic Buddhism in India*. (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2004) , 19–44.
- . "The Buddhist 'Monastery' and the Indian Garden: Aesthetics, Assimilations and the Siting of Monastic Establishments." in *Journal of the American Oriental Society* 126, no. 4, 2006, 487–505.
- Schulzer, Rainer. "Crossroads of World Philosophy: Theoretical and Practical Philosophy in Inoue Enryō." *Kokusai Inoue Enryō kenkyū* 国際井上円了研究 1, 2013, 49–55.
- Shinpen tetsugakudō bunko mokuroku* 新編哲学堂文庫目録. Ed. Tokubetsu Korekushon Mokuroku Henshū Inkai 特定コレクション目録編集委員会編集. (Tokyo: Tōyō Daigaku Fuzoku Toshokan 東洋大学附属図書館, 1997)
- Soper, Alexander C. "Early Buddhist Attitudes Toward the Art of Painting." in *The Art Bulletin* 32, no. 2, 1950, 147–151.
- Sueki Fumihiko 末本文美士. "Junsei tetsugaku to bukk'yō: Inoue Enryō" 純正哲学と仏教 : 井上円了. in *Meiji shisōka ron* 明治思想家論: *Kindai Nihon no Shisō, Saikō* 近代日本の思想・再考, 1. (Tokyo: Toransubiyū, 2004) , 43–61.
- Takayama Hidetsugu 高山秀嗣 [alt. 高山秀嗣]. "Inoue Enryō no kyōiku kan: Tetsugakkan o chūshin ni" 井上円了の教育観: 哲学館を中心にして. in *Idogaku bukk'yōgaku kenkyū* 印度學佛教學研究 55, no. 2, 2007, 768–773. (available on-line at J-STAGE: https://www.jstage.jst.go.jp/browse/ibk1952/55/2/_contents/-char/ja/)

Watanabe Yūitsu 渡邊雄一. "Inoue Enryō no tetsugakkan fuzoku tōyō toshokan kōsō ni tsuite" 井上円了の哲学館附属東洋図書館構想について. in *Bukkyō daigaku kyōikubu gakkai kiyō* 佛教大学教育学部学会紀要 2, 2002, 257–277.

Wayland, Francis. *The Elements of Moral Science*. (Reprint. Boston: Gould and Lincoln, 1835 (1860))

(available on-line at the Internet Archive:

<http://archive.org/details/elementsmoralsc27waylgoog>)

(ウィリアム、ボディフォード・UCLA 教授)

付録 哲学堂図書館の概要

パート A: 日中非仏教書籍 (國漢書)

類		種	卷	冊	写本	写本冊	唐本	唐本冊
	1-2: 神教部							
1	神教部一、神書	70	389	293	6	11		
2	神教部二、教書	41	132	91	8	15		
	3-4: 經書部							
3	經書部一、四書 _及 孝經	70	423	309	1	1	1	20
4	經書部二、五經	63	1,071	582	1	1	2	32
	5: 諸子部							
5	諸子部	54	624	271	1	1	10	45
	6-8: 儒書部							
6	儒書部一、 _{支那} 性理	19	540	235			4	68
7	儒書部二、 _{支那} 雜著	34	199	106			2	2
8	儒書部三、 _{日本} 諸家	65	141	113	1	1		
	9: 醫書 _及 本草部							
9	醫書 _及 本草部	41	228	165	1	1		
	10: 仙書 _及 養生部							
10	仙書 _及 養生部	29	173	125			2	10
	11-12: 兵書部							
11	兵書部一、兵法	27	180	123	5	7		
12	兵書部二、軍談	19	338	300			1	20

	13: 政法經濟部							
13	政法經濟部 <small>附農業</small>	33	201	168	4	29		
	14: 天文歳時部							
14	天文歳時部	53	164	136	1	1		
	15: 地理紀行部							
15	地理紀行部	34	193	160	1	1		
	16-18: 史傳部、日本							
16	史傳部一、日本通史	11	386	195				
17	史傳部二、日本別史	23	724	382	2	13		
18	史傳部三、日本傳記	31	431	212	1	15		
	19-21: 史傳部、中国							
19	史傳部四、支那通史	18	819	440			5	94
20	史傳部五、支那別史	13	1,088	383				
21	史傳部六、支那傳記	31	155	102	2	3		
	22-25: 文學部、日本文学							
22	文學部一、日記物語	32	232	201				
23	文學部二、國文法	21	96	84				
24	文學部三、和歌	53	430	253	2	5		
25	文學部四、俳句	32	83	83	3	3		
	26: 文學部五、小説 (和漢)							
26	文學部五、小説 (和漢)	23	421	342			1	1
	27-30: 文學部 (漢文)							
27	文學部六、漢文 (支那人一家文)	30	350	186			1	4

28	文學部七、漢文（支那人諸家集）	27	371	206			1	28
29	文學部八、漢文（日本人作）	22	114	67				
30	文學部九、作文（漢文）	41	171	136			2	3
	31-32: 文學部（詩）							
31	文學部十、詩集	65	331	182			1	3
32	文學部十一、詩作	19	105	75			1	20
	33-34: 修身道話部							
33	修身道話部一、國文	141	409	335	5	5		
34	修身道話部二、漢文	23	48	40	1	1		
	35: 民間讀本部							
35	民間讀本部	37	49	45				
	36: 相法卜筮部							
36	相法卜筮部	27	53	48	2	2		
	37: 書畫技藝部							
37	書畫技藝部	33	103	100	3	3		
	38-40: 怪談草紙部							
38	怪談草紙部一、 <small>國文版本</small>	103	493	398				
39	怪談草紙部二、 <small>漢文版本</small>	12	536	69			2	2
40	怪談草紙部三、 <small>國漢文寫本</small>	45	151	109	45	109		
	41-43: 隨筆部							
41	隨筆部一、 <small>國文版本</small>	107	528	426				
42	隨筆部二、 <small>漢文版本</small>	24	225	112			3	10
43	隨筆部三、 <small>國漢文寫本</small>	31	113	84	31	84		

	44: 雑書部							
44	雑書部	27	79	56	4	4	1	6
	45-47: 類書叢書部							
45	類書叢書部一、 <small>日本人編述</small>	23	329	227				
46	類書叢書部二、 <small>支那人編述</small>	15	907	218			10	137
47	類書叢書部三、 <small>文献通考・淵鑑類函・佩文韻府</small>	4	1,033	475			4	475
	48: 字書目録部							
48	字書目録部	31	373	210				
	49: 皇清經解							
49	皇清經解	1	1,304	360			1	360
	50: 小形唐本							
50	小形唐本	32	1,682	404			32	360
	51-53: 國文小本							
51	國文小本 <small>(縦綴)</small>	90	187	143				
52	國文小本 <small>(横綴)</small>	15	56	56				
53	漢文小本	56	218	56				
	総計	2,021	20,179	10,677	131	291	33	1,695

100%

2.7%

15.9%

パート B: 日中仏教書籍 (佛書)

類		種	卷	冊	写本	写本 冊	唐本	唐本 冊
	1: Sanskrit Learning (Bongaku)							
1	梵學部	56	143	124	13	38		
	2: Logic (Inmyō)							
2	因明部	26	63	58	3	3		
	3-5: Histories & Biographies by Chinese & Japanese Authors							
3	史傳部一、支那選述	42	495	250			1	1
4	史傳部二、日本選述 普通	50	541	314	3	3		
5	史傳部三、日本選述 特殊	91	219	172	7	8		
	6: Non-Buddhist & Hīnayāna Texts							
6	外道 <small>及</small> 小乘諸宗部	53	133	92	9	14		
	7-8: Abhidharma kośa (Kusha)							
7	小乘俱舍部一、論釋	29	327	228	9	43		
8	小乘俱舍部二、雜著 部	30	151	132	9	17		
	9-11: Vinaya & Monastic Discipline							
9	小乘律部	23	151	132				
10	大乘律部	51	174	147	5	11		
11	大小兩律雜部	110	198	176	9	12		

	12-21: Mahāyāna Sūtras							
12	大乘經釋部一、淨土 經	76	263	243	4	15		
13	大乘經釋部二、維摩 楞嚴等	71	487	430	3	6		
14	大乘經釋部三、盂蘭 盆勝曼[鬘]等	46	187	177	3	4		
15	大乘經釋部四、般若 經仁王經	59	116	106	2	2	2	2
16	大乘經釋部五、法華 經三大部	64	463	515	3	20		
17	大乘經釋部六、法華 經他釋	53	320	308	2	7		
18	大乘經釋部七、涅槃 經	15	189	150	3	16		
19	大乘經釋部八、華嚴 經	14	264	138	2	5		
20	大乘經釋部九、大日 經	46	457	333	2	10		
21	大乘經釋部十、 <small>眞言諸經及 雜經</small>	64	199	173	2	10		
	22-23: Hossō (Yogācāra)							
22	法相部一、論釋部	45	562	389	8	91		
23	法相部二、宗意 <small>及</small> 雜著 部	68	205	185	25	50		
	24: Sanron (Madhyamaka)							
24	三論部	23	77	71	4	7		
	24-27: Tendai (Tiāntái) Lotus							
25	天台部一、論釋部	7	129	86	3	3		
26	天台部二、宗意部	85	296	264	5	14		

27	天台部三、雜著部	126	432	339	5	6		
	28-29: Kegon (Huànyán) Flower Garland							
28	華嚴部一、論釋部起 信 _及 原人	44	151	125	4	5	1	1
29	華嚴部二、宗意 _及 雜著 部	43	124	114	9	16		
	30-32: Shingon Esoteric							
30	眞言部一、論釋部	15	142	142				
31	眞言部二、宗意部	51	371	249	3	15		
32	眞言部三、雜著部	108	366	306	8	8		
	33-34: Zen (Chán)							
33	禪家部一、宗意部	85	368	240				
34	禪家部二、雜著部	107	251	213	4	4		
	35-38: Pure Land (Jōdo)							
35	淨土部一、論釋部	69	351	305	1	1		
36	淨土部二、淨土宗宗 意部	46	207	161				
37	淨土部三、淨土宗雜 著部	134	345	276	7	11		
38	淨土部四、眞宗	63	217	179	1	1		
	39: Nichiren Lotus							
39	日蓮部	70	280	275	3	3		
	40: Other Teachings & Overviews							
40	餘宗 _及 八宗ノ部	32	75	65	5	5		
	41-42: Disputations & Polemics							
41	論議部、對内	55	140	126	8	8		
42	論議部、對外 _及 天文	60	159	131	2	2		

	43: Poetry							
43	詩文部	50	301	185	1	1		
	44: Essays							
44	隨筆部	45	209	182	2	2		
	45: Teachings for the Laity							
45	通俗部	73	258	234				
	46: Miscellaneous							
46	雜書部	101	211	168	12	12		
	47: Anthologies							
47	類書叢書部	19	364	220	1	4		
	48: Glossaries							
48	法數 _及 音義	30	350	200	5	21		
	49: Catalogs							
49	條目 _及 目錄	85	213	222	33	45		
	50: Complete Buddhist Canon							
50	藏經部 [縮刷大藏經]	1,916	8,534	419				
	51: Small Size Books							
51	小本部	35	161	75	3	3		
	totals	4,759	21,389	10,544	255	582	4	4

100%

5.5%

0.0%

Inoue Enryō 井上圓了. 1916 (1985). Tetsugakudō Toshokan tosho mokuroku 哲學堂圖書館圖書目錄. Reprint. Tokyo: Tōyō Daigaku fuzoku Toshokan 東洋大学附属図書館